

* ハクビシンの棲家になった塔望遠鏡室

東京天文台の塔太陽望遠鏡室(写真1)が完成したのは大正15年(1926年)である。東京天文台75周年誌によれば、「塔望遠鏡はツアイス社製で、ポツダムのアインシュタイン塔と同型式である。塔の頂上のドームに設置した65cmのシーロスタットと焦点距離14.5mの集光レンズによって太陽光線を垂直下方に導き、半地下室の水平分光器においてスペクトルができる。分光器は平面回折格子(1mmにつき600本の線を引いた金属平面鏡)によるものと、大プリズム分光器があり、いずれもリトロウ型である。回折格子第3次スペクトルでは分散度は $0.4\lambda/\text{mm}$ 、理論的分解能は220,000である。これらの装置は昭和3年に購入し、遂次整備改良を重ね、戦前にはマグネシウム三重線の輪郭、黒点における分子スペクトルの研究、ゼーマン効果による黒点の磁場の研究、ドップラー効果による太陽自転速度などの観測的研究が行われた」とある。この塔望遠鏡の組み立て整備を行ったのが、現在100歳でお元気に2009年7月22日の皆既日食観望にお出かけになった藤田良雄先生である。皆既日食の後の集まりで、藤田先生は早乙女台長から塔望遠鏡の組立てを命ぜられたというお話をされていた。

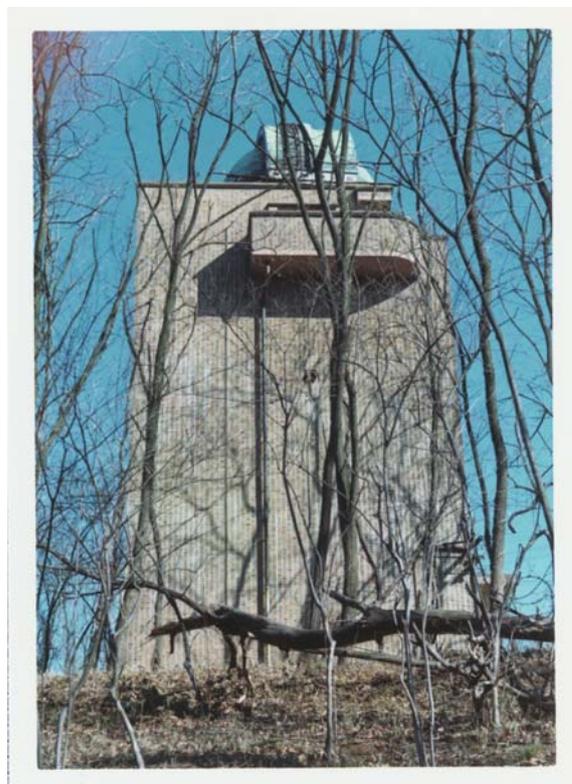


写真1 塔望遠鏡室

天文月報 1999 年 9 月号に齊藤国治先生が「三鷹のアインシュタイン塔の物語」という記事で建設当時のことを詳しく述べられている。齊藤先生はこの塔望遠鏡の半地下の分光器室の北側 1/3 を使っているいろいろな実験をされていた。筆者は昭和 41 年(1966 年)に岡山天体物理観測所から三鷹に移り、最初に手がけたのが塔望遠鏡の復活であった。筆者が手がけた時には、塔望遠鏡は大理石の配電盤のフューズが入ったスイッチ類が部品の補充がなく使用不能に陥っていた。そこで筆者は細工のやりにくい大理石の配電盤を木製に取り替え、スイッチ類を秋葉原に買いに走り、なんとか塔望遠鏡を復活させた。その復活からしばらくは、守山、日江井、平山といった先生方が太陽スペクトルを撮るようになったが、太陽の分光観測は岡山天体物理観測所に置かれた 65cm 太陽クーデ望遠鏡へと移り、塔望遠鏡は長い休眠状態に入った。齊藤先生は天文月報に「三鷹のアインシュタイン塔」という記事を書いているが、同じ建物で仕事をしていたこともあるし、三鷹で研究室が隣にあった齊藤先生のグループが塔望遠鏡のことをアインシュタイン塔と呼んでいるのを聞いたことはないし、筆者に塔望遠鏡の面倒を見るように指示した牧田貢氏も、太陽物理の人たちも塔望遠鏡のことを誰一人「アインシュタイン塔」などと呼んでいた人はいなかった。なぜ最近、「塔望遠鏡」のことを「アインシュタイン塔」と呼ぶのかと異論を唱える人がいる。



写真 2 半地下の分光器室にある通気孔

手元に、学士会発行の「先学訪問～21 世紀のみなさんへ～03 天文学者 藤田良雄編」という小冊子がある。この中に藤田先生の話として「先生が三鷹の東京天文台に入ったときに、アインシュタイン塔の建設が計画されていた」という言葉が出てくる。確かにポツダム「アインシュタイン塔」と同様のものを建設したようである。ともあれ、塔望遠鏡が長い眠りについて 40 数年を経て、アーカイブの仕事で何度かオバケ屋敷のようになった塔望遠鏡室に入るが、昭和初期に導入されたシーロスタットはガラス鏡から熔融水晶鏡に変わっており、集光系もレンズから反射望遠鏡になっていて、望遠鏡としてはまだ健在で

あり、アーカイブの対象としては目玉の一つである。天文情報センターの新人研修の一環で新人（岡山天体物理観測所から 8 月 1 日付で移動してきた長山省吾君）を同道して半地下の分光器室を探検していた際、分光器室の東西の壁にある直径 40cm ばかりの通気孔（写真 2、3）の奥にハクビシンと思われる「けもの」がいることに気がついた（写真 3）。



写真 2 壁面の通風孔



写真 3 奥深い通風孔

急いでカメラを取り出している間にその動物の顔が見え、顔の中央の鼻筋に白い文様が見え、目と目があつたのである。しかしカメラを取り出してからはいくら待っても顔を出さず、胴体部分しか写真に撮ることができなかった。それでも足はきちんと写っている（写真 4）。



写真 4 土管の奥にうずくまる「けもの」

自動光電子午環棟の望遠鏡フロアの階下にハクビシンの死骸があり、自動光電子午環のピアにハクビシンの足跡があった記事をアーカイブ室新聞 126 号に書いた。その記事野中に天文台構内で撮影されたハクビシンの写真を紹介した。確かに国立天文台の三鷹キャ

ンパスには野生のハクビシンが生息しているのである。そして今回、筆者は生きたハクビシンをこの目で見た。塔望遠鏡分光器室に出入りしているハクビシンの生活の痕跡があちこちにあり、木の実を大量に持ち込み、排便跡が残っていたが、これまで見かけたものは相当古いものばかりであったのだが、今回は塔の最階下の床にまだ新しい排便がたくさんあり非常に臭いにおいを放っているのである。

長い休眠状態で電気さえ止められた塔望遠鏡棟はハクビシンの住処と化している。塔望遠鏡棟は文化庁に登録された「有形登録文化財」である。筆者はこの由緒ある塔望遠鏡室を「分散型国立天文台博物館構想」の一角として有効利用をしていきたいと考えている。塔屋上のドームの中にはまだ熔融水晶の鏡に交換されたシーロスタットがあり、塔の中にはレンズを使ったツアイス製の集光系から日本光学製の反射望遠鏡に更新された望遠鏡もある。そして建物は大正15年建設とは思えないほどしっかりしている。

写真5は、ハクビシンの生活の痕跡である。ここは君の「お便所」ではありません。



写真5 ハクビシンの排泄物